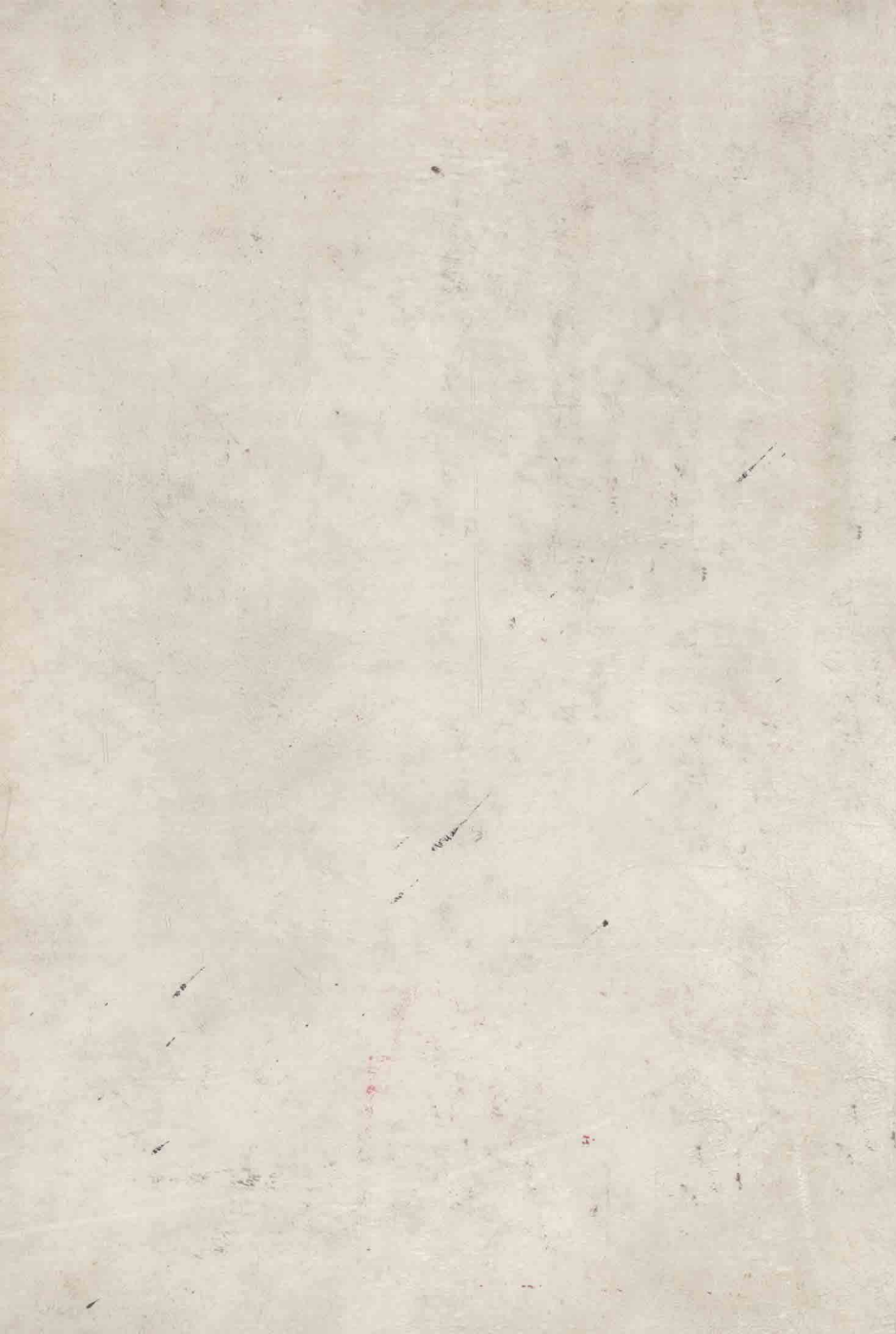




大佛次郎自選集 現代小説 第6卷

朝日新聞社

旅路

大佛次郎自選集 現代小説

第六卷 旅路

全十卷・第九回配本

一四〇〇円

昭和四十八年六月十日発行

著者 大佛次郎

装幀者 原 弘

発行者 岡見 璋

印刷所 明善印刷

製本所 松岳社

製函所 加藤製函

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

0393-240136-0042

大佛次郎自選集 現代小説 第六卷

第六卷目次
旅路

旅 路

木の間

電車は北鎌倉の駅を出て、古い杉の森の間を通り、両側に迫った低い山ふところに寺らしい屋根や静かな住宅の聚落を覗かせて走り始めていた。次が自分の降りる鎌倉なので、岡本妙子は立ち上って手を伸ばして、網棚に置いてあった花束を取った。花はセロファン紙で柔かくくるんであった。白いのと濃い紫色との鉄線の花だったので、その色が薄い紙質をすかして、ぼかしたように見える。日曜日の鎌倉駅は、人で混雑していた。歩廊を埋めるようにして外へ押出されて行く人波の渦から脱げ出ると、妙子は近くにあって一度寄ったことのある喫茶店の方に広場を横切って行った。心覚えだけで、さがして行っただのが、木の扉を閉めてある入口を見つけて、入ってから、「お宅、電話、御座いましたわね？」

電話器は、すぐ近くの板壁に寄せた小さい卓の上に在った。光の眩しい戸外を歩いて来て、店の中が暗かったせいもあるが、あまり側にあって気がつかなかったのが極り悪かった。

電話帳を見て、妙子は、叔父の岡本素六の家の番号を確かめた。

卓にもたれながら、耳にあてた受話器の中で、信号のベルが遠く鳴っているのを聴いていた。春

の真昼らしいだるい気持であつた。目の前に置いてある硝子のケエスの中に、化粧した洋菓子や、レモンの実が並べてある。レモンの実が新しくつやつやとして、美しい。

「信号してもお出になりませんが。」

と、交換手が知らせて来た。

「そう？」

ちよつと眉根を寄せたが、

「では、もう少し経つて、もう一度、呼んで下さらない？」

珈琲を貰つて、壁の画の額など眺めながら待った。

十年近く前に叔母が死に、叔父の素六は、今度は、ひとり子の明を戦争中、南支でなくしてから、孤独の身の上に成つたが、家事の世話をしている雇い女がいるので、誰れかが電話に出る筈であつた。広い家だったが、電話は勝手に近い廊下に在つた。

もう一度受話器を取上げた。また信号のベルが繰返して鳴るのを聴き、叔父の家が深閑としているのが想像出来た。やはり誰れも出ない、と言われた。

「そんな筈なのよ。故障なのかしら？」

思わず、こう言ふと、交換手は、急に気短い調子の返事になった。

「信号は鳴つてて、お出にならないんです。」

叔父の家には明の墓のある寺から後で廻ることにしてある。駅附近らしく人で賑わっている町筋

から離れると、踏切りを渡って、樹木が多く、垣根も生垣や竹を編んだものが多い住宅地の間を寺に向った。

いつ来ても気がつくことだったが、鎌倉は見物に来る人たちで大通りが埃っぽく賑わっているのと反対に、裏通りは稀れにしか人に出逢わないくらいに閑静なものであった。どの往来の行く手にも樹木の繁った山が見えているのも、東京から来た者には羨ましい。

境内に人の気配もない寺の門を見て、墓地にはいると、一層静かだった。竹藪だの寮風の住宅の裏手に、小高い台地に在るのだが、山がすぐ目の前に迫る感じで、土地で谷戸と呼んでいる山の崖に挟まれた狭い場所に墓石が並んである。山裾の崖をくりぬいた石窟が、幾つも並んで、それが一、人の墓となっているのも、よその土地に例のないことであろう。樹々が日蔭を作っているから、石に苔が多く、冬の落葉がまた深い。

人は他に誰れもないものと期待して歩いて来て、妙子は、従兄の墓に人の影が動いているのを見つけた。

（ああ、叔父さん、明さんのお墓に来ていらした。）

晩春の風のない午後で、墓地の木々は鎮まり返り、雀らしい小鳥の声が枝の間から聞えているだけである。従兄の墓で動いているひとは、脇目もふらない様子で竹箒で路面をはいている。近寄って見ると、横顔が若く、叔父の素六ではなかった。上着も帽子も脱いで、脇までまぐつたワイシャツから太い腕が出ている。

叔父に頼まれて掃除に来ているものと見た。

「叔父さま、いらっしゃる？」

青年は、驚いたように振向いて妙子を見つめてから、

「誰れのこと？」

と、口走って、

「僕は知りませんよ。」

妙子が途方に暮れたように黙り込んでいると、青年はまた箒を動かし初めて、落葉をかき寄せながら、

「たいへんな木の葉だ。」

と、ひとりごととも妙子に聞かせるともなく言った。

「鎌倉のコートにテニスに来たから、ちょっと寄って見たんですよ。」

縮木しゅもをかけたラケットが、上着や帽子の下に生垣の上に伏せてあるのに気がついたし、ひき緊しまった顔立であった。

「明さんのお友達？」

妙子は、自分も掃除を手伝おうと身支度しながら、こう尋ねて見た。

「ええ、学校の……。が、死んでしまったら、つまらない。」

と、青年は言った。

「戦争だったから仕様がなければ、メエ（明）の奴ア、自分で買つて他人より危険な場所へ出たのに違ひないと思うんですよ、学校時分も、そんな気性でしたからね。惜しいことをした。」

「水、御座いませんか？」

落葉をはらった地面の草をむしっていた青年は、かがんだ姿勢のまま振向いて、

「井戸がその先に在ったかな？」

「見て来ますわ。」

墓地の間を戻って行くと、露天の古い井戸があった。そう深くなかったが、つるべは歪んだバケツに繩を結んだものである。水を掬み取る手桶も、タガがはじけていて用をなさないので、つるべのバケツのまま運ぶことに成った。

青年は煙草を口にくわえて立っていたが、

「君は、死んだ岡本の何なんです？」

「いとこ。」

と、短く答えてから、妙子は、もう少し丁寧（ていねい）に名乗ることにした。

「岡本妙子です。」

「メエに妹はなかったと思った。」

と、青年は微笑してから、

「メエが僕のことを話したかどうか知らない。予科から学校を出るまでメエと一緒にだった津川です。」

郷里は和歌山なんだけれど、学校に通う間、鎌倉にいたので、メエと仲善かったんです。」

「あたし、まだ子供でしたわ。それに、その時分はまだ京都の家にいたものですから、明さんとも、極く、たまにしかお会いしなかったんです。」

漂う煙草の煙の中で、津川は若い語氣に力をこめた。

「死なしたくなかった。」

「叔父を御存じ？」

「そうだな。二度か三度、見た程度かなあ、いや、往来を歩いているのを見かけたことは、いくらでもある。メエの家へ行つてオヤジさんを見たのは、そんなものでしょう。三四度かしら。」

こう答えてから、附加えた。

「ほんとうのことを言うと、おっかなかった。若い僕らから話すこともなかったし、見つかると、叱られそうに見えた。」

「そんなでもないんですわ。」

花生けに水をそそぎ、バケツに残ったのは、墓石を濡らすように静かに掛けて行つた。何の為にそうするのか知らなかったが、お墓にまいる時はそうするものだど、どこかで覚えていたようである。石は三年ほど前に建てたものでまだ新らしかった。水に濡れた部分は、心持、青い色に変わって来る。

妙子は持つて来た花束をほどき、花生けに分けて差すのに余念なかった。

津川が後から尋いた。

「何の花です？」

「鉄線、きれいでしょう？」

「花なんて、まともに見たこともない。むろん、買ったこともない。」

と、津川は、くつろいだ心を感じさせた。

「縁がないのだから、名前も、いくつ知っているか疑問だ。テッセン？ 聞いたこともない。変な名ですね。」

「鉄の線って書くんです。茎が細くて針金のようにかたいせいでしょうか？ 私の京都の家の庭にあつて、いつも今時分になると、咲きました。もつと薄い色もあるんですけれど、この濃い紫と、白いのがきれいなんです。」

「メエだつて、花の名は、あまり知らなかったろうと思うな。花屋へ行って買ってとどけるような相手も、まだなかった。僕も、今日、メエの墓へ行ってやろうと思つて家を出て、花を持って来るなんてことは、気がつかなかった。僕は、メエの為にちゃんと、ほかのものを準備して来たんです。」

「お線香？」

「そんな、陰気なものじゃない。」

生垣の下に置いてあつたズックのポストンバッグをあけ、汗で濡れたシャツなど詰めてあつたの

を、かき廻して、底の方から津川が出て見せたのは、ポケット入りのウィスキーの小瓶こびんである。「瓶は安ものだが、中味は生一本と言うんですか、ちゃんとした日本酒なんだ。学校もテニスも一緒だった仲間が、郷里に帰って、家の仕事を継いで醸造しているのを、送ってくれたんでしてね。おれの造った酒だから、メエの墓にかけてやってくれて、手紙で言ってきたんで。」

瓶のあとから、猪口ちぐちまで出した。「ちゃんと、揃そろってる。」

墓地を出てから、鶴岡八幡の境内に在る近代美術館に、ふたりは入った。

「画は、僕、わからないんです。」

と、津川はあけすけに言った。

螢光燈の光をあててフランス名画展が催されていたのだが、それをざっと見て通り抜けるだけで、彼が妙子を案内したのは、展覽会場と同じ二階の一隅に、壁で隔離されている喫茶室であった。とにかく、そこが明るくて鎌倉でも一番感じのよい場所だと津川は紹介した。

連れられて行って見て、妙子も美しい場所だと認めた。コルビュジエ式の建築様式の、箱のように壁で大きく面を取った間から、真下に八幡宮の池の全部と、樹木が美しくかぶさって繁った近くの山を眺めて、卓を囲むのである。池は、こまかく厚い浮き草に一面に蔽おほわれていて、水があるとは見えず、ひろい緑の芝生を見るような気持であった。地面と同じに歩けそうに思えるのだが、と